

前回は桑名の材木商である佐々部家のことを書いたが、桑名は木材の集散地として栄えた。木曾三川の上流は豊富な木材を産出し、その多くは木曾三川を筏で運ばれ、桑名または名古屋（白鳥）へ送られてきた。山元で切り出され木材は1本ずつ川に流され、途中の綱場を集められて、筏に組まれた。江戸時代の木曾川は錦織（八百津町）、飛騨川は下麻生（川辺町）、長良川は高原（郡上市）、揖斐川は横山（揖斐川町）に綱場があった。



錦織綱場（『kisso』105号より）

伊勢神宮の遷宮用材に木曾材が使われたのは貞和元（1345）年度が最初といわれる。その後は江戸時代の初めころに大杉山（伊勢）に移ったこともあったが、宝永6（1709）年度から寛政元（1789）年度までを除いて、現在まで木曾材が使われている。なお応永29（1422）年には鎌倉円覚寺再建に木曾材が使われたが、山元から桑名まで川を筏で運ばれ、桑名から海上を船で運ばれている。

江戸時代に木曾材が使われたのは宝永6年度の遷宮では3038本の用材が尾張藩から錦織で伊勢神宮に引き渡された。以後の運送方法についての記録がないが、桑名まで筏で流されてきたであろう。

嘉永2（1849）年度の遷宮では天保10（1839）年の木曾山内見に始まり、同13年4月9日に現地で木本祭が行われた。同年9月15日に川下げが開始され、順次、錦織へ流された。ここで筏に組まれて、10月8日から12月1日にかけて錦織を出発した。総数は2949本で725組の筏であった。御祝木4本は11月2日に錦織に着いて、同月10日に4隻の船に分乗して錦織を出発している。途中の黒瀬（八百津町）や川合（美濃加茂市）・犬山（犬山市）・草井（江南市）・円城寺（笠松町）・起（一宮市）・などで休泊し、参詣人が多く集った。同月16日に長島領又木（桑名市）に到着し、同月19日に中吉丸に積んで大湊（伊勢市）に送られた。

享保14（1729）年度は長島領大島（桑名市）、文化6（1829）年度と文政12

(1829) 年度は二ッ屋 (弥富市) に集積されたが、嘉永 2 年度と明治 2 (1869) 年度は又木に集められた。嘉永 2 年度は又木からは大湊 (伊勢市) までは船積みで、大湊の鈴木清左衛門と三国屋伝兵衛が請け負った。錦織から又木までの費用は金 895 両ほどであり、又木から大湊までは金 180 両ほどと推定されている。大量に積める船賃の方がはるかに安い。

なお又木の貯木場は長島川の現在の「長島水辺のやすらぎパーク」付近にあった。明治 9 (1876) 年に桑名城跡の堀に貯木場が設けられた。